

東西南北いろいろな方面の人びとと交易する際に 交換財として活用されたのは、佐渡特産の管玉類



国重要文化財：新穂遺跡群の玉作資料
(『新潟県史 資料編1』, 1983)

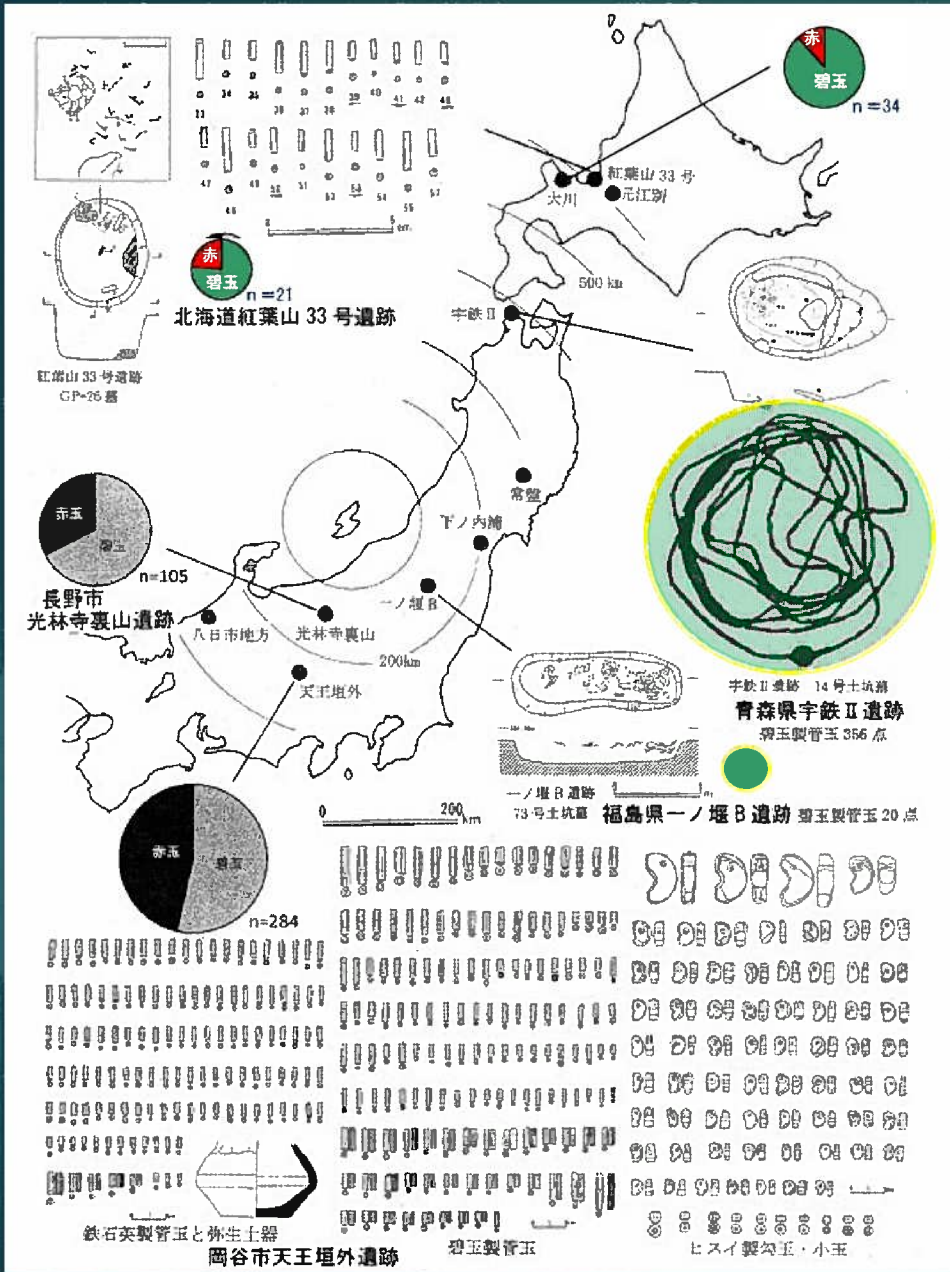


鉄石英

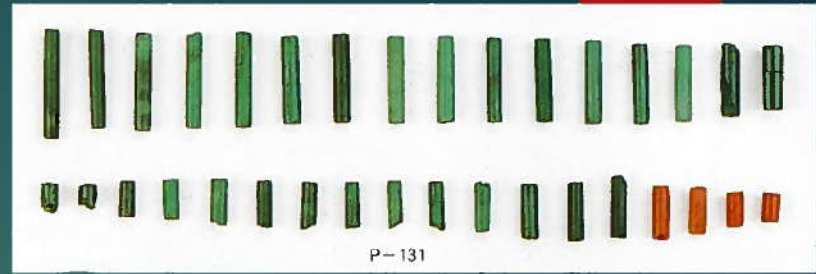
緑色凝灰岩

平田遺跡で出土した玉作行程資料
(今回企画展図録より)





東北・北海道まで佐渡製品が流通

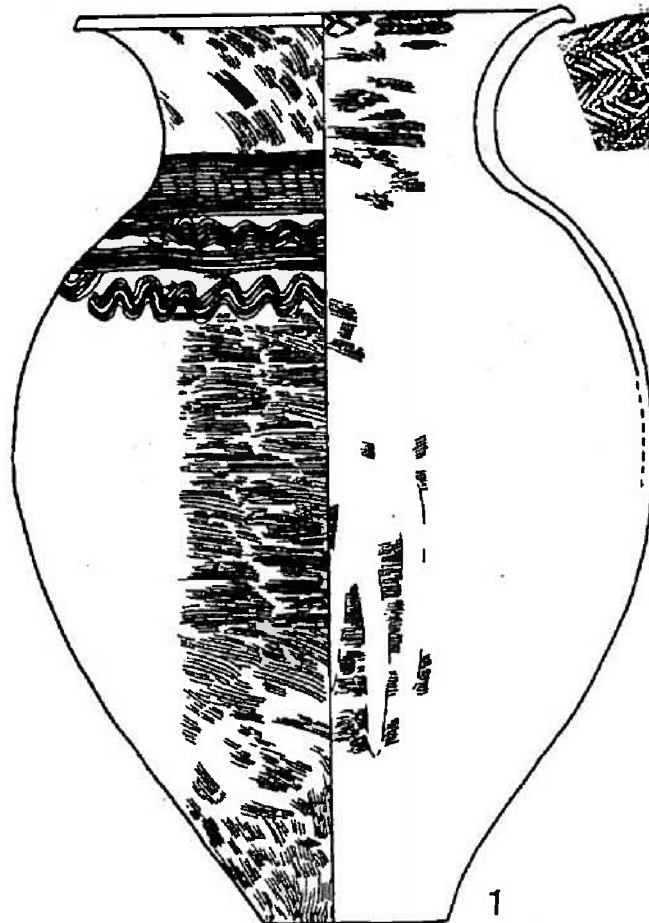


余市町大川遺跡

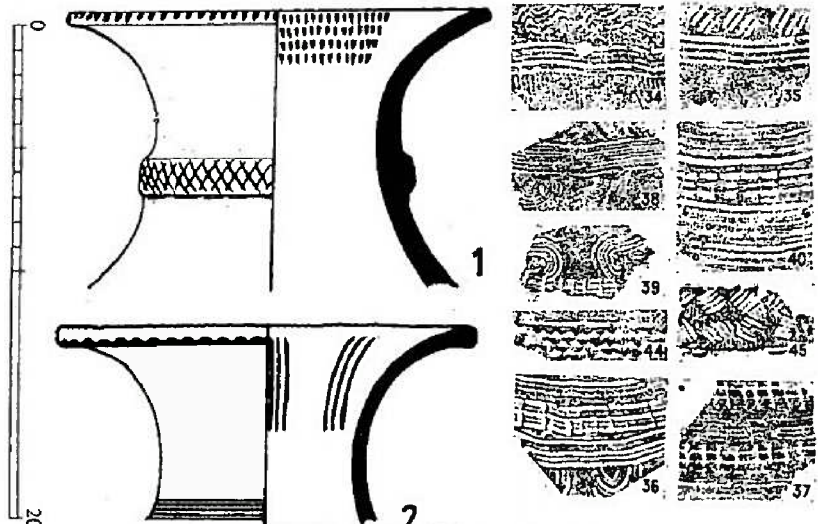


石狩市紅葉山33号遺跡

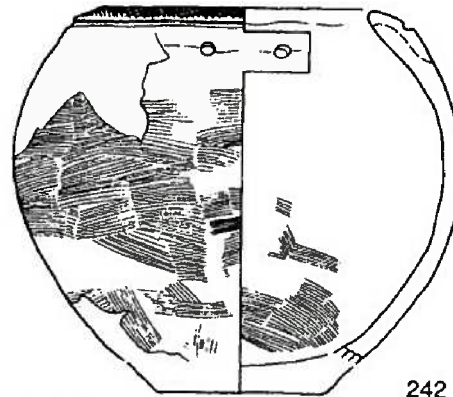
新穂玉作遺跡の土器



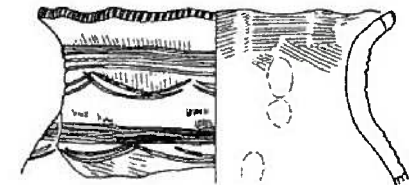
若宮遺跡の弥生土器 (大平 2014)



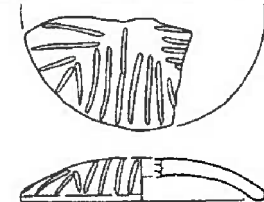
桂林遺跡の弥生土器 (『佐渡』1964)



頸壺は北近畿以西に由来



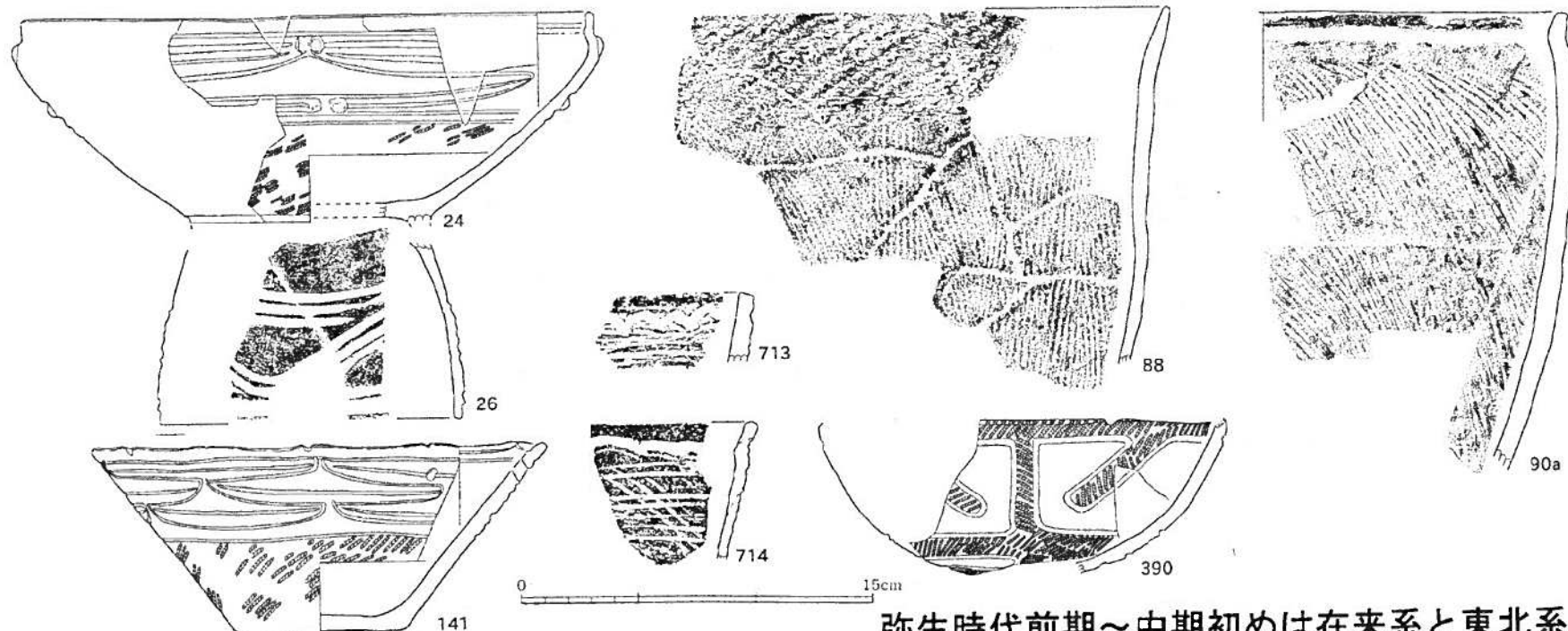
下越以北から持ち込まれた土器



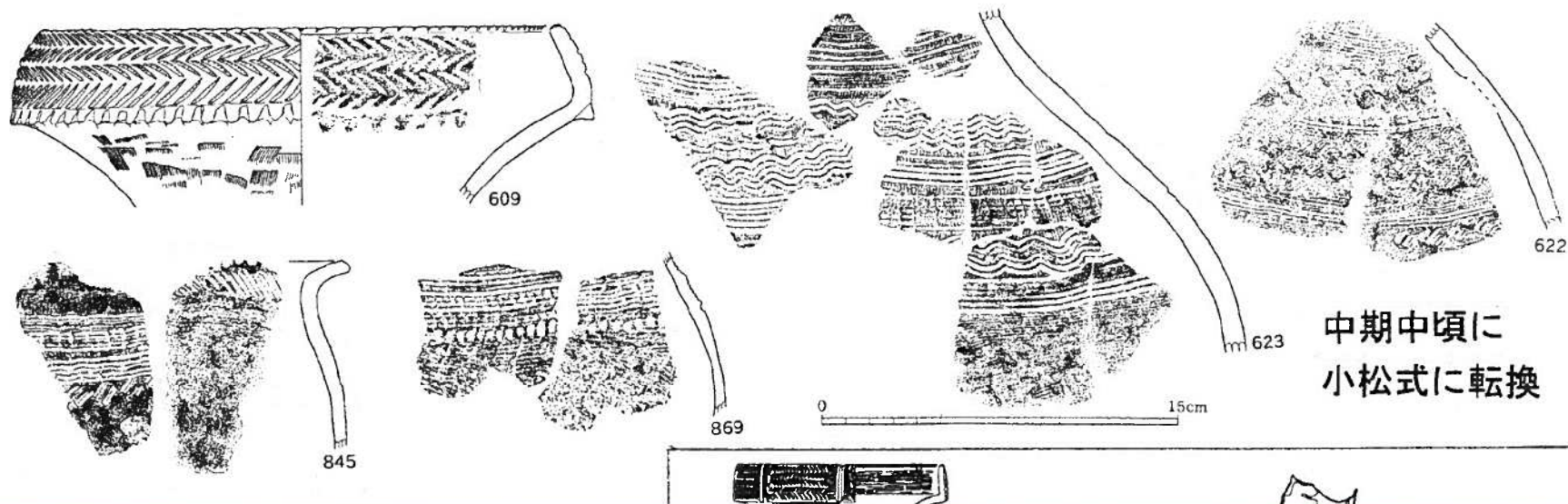
信州から運ばれた土器

『平田遺跡』2000)

新潟市域で 農耕社会への転換期がつかめた西郷遺跡(旧亀田町)

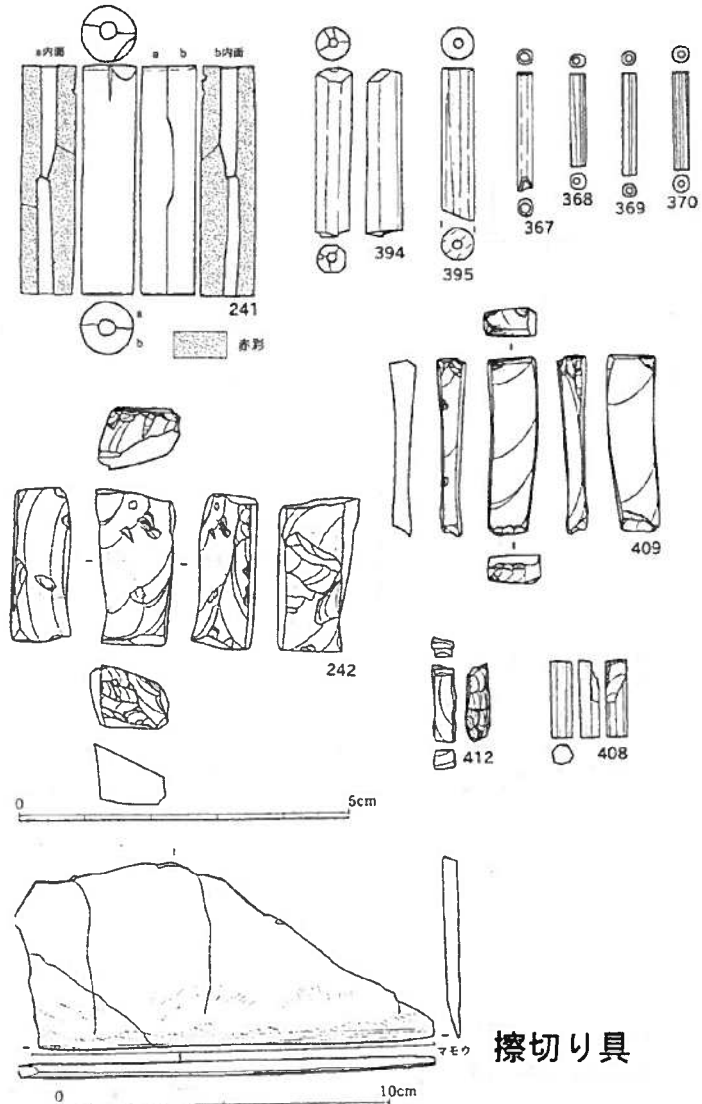


弥生時代前期～中期初めは在来系と東北系

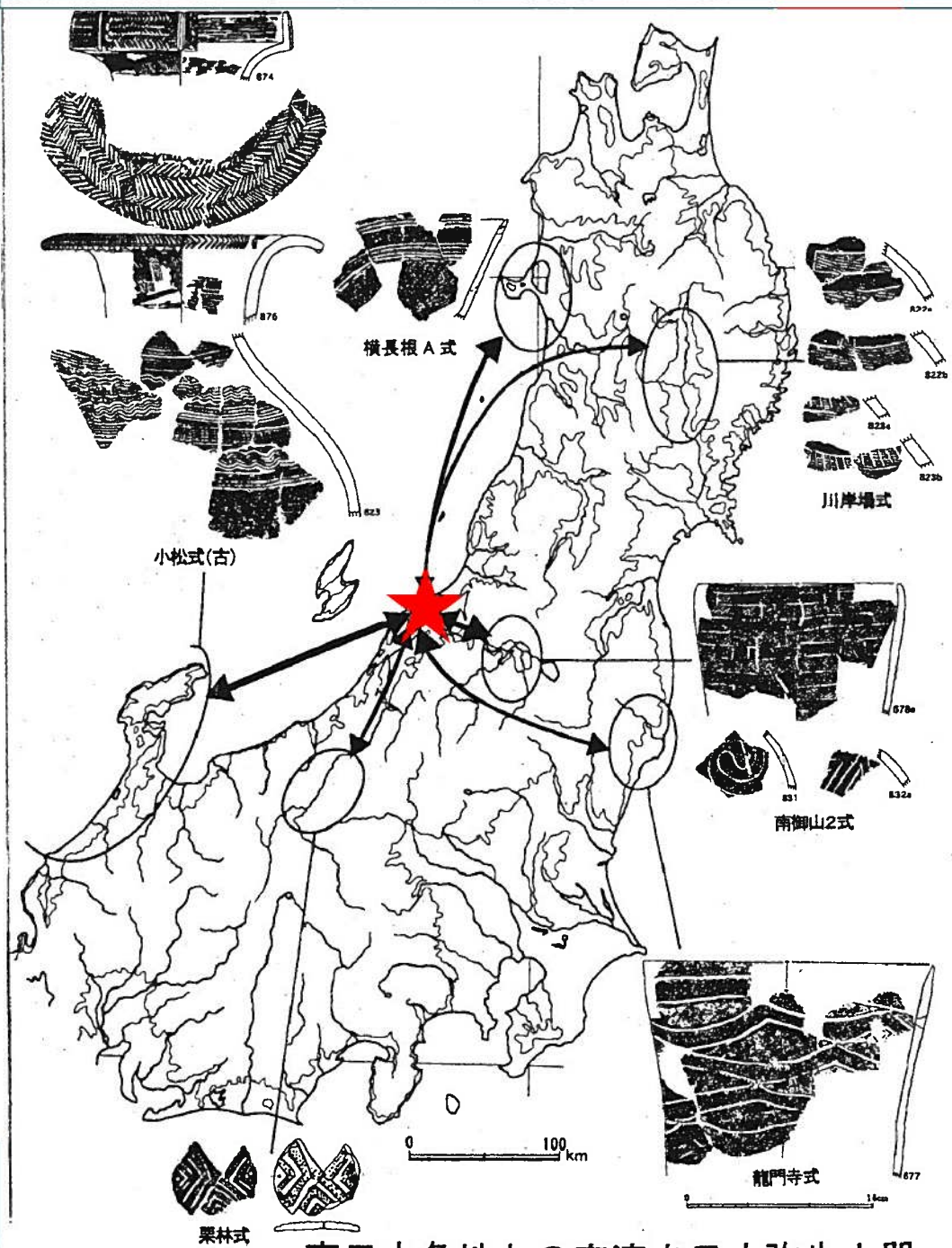


中期中頃に
小松式に転換

西郷遺跡

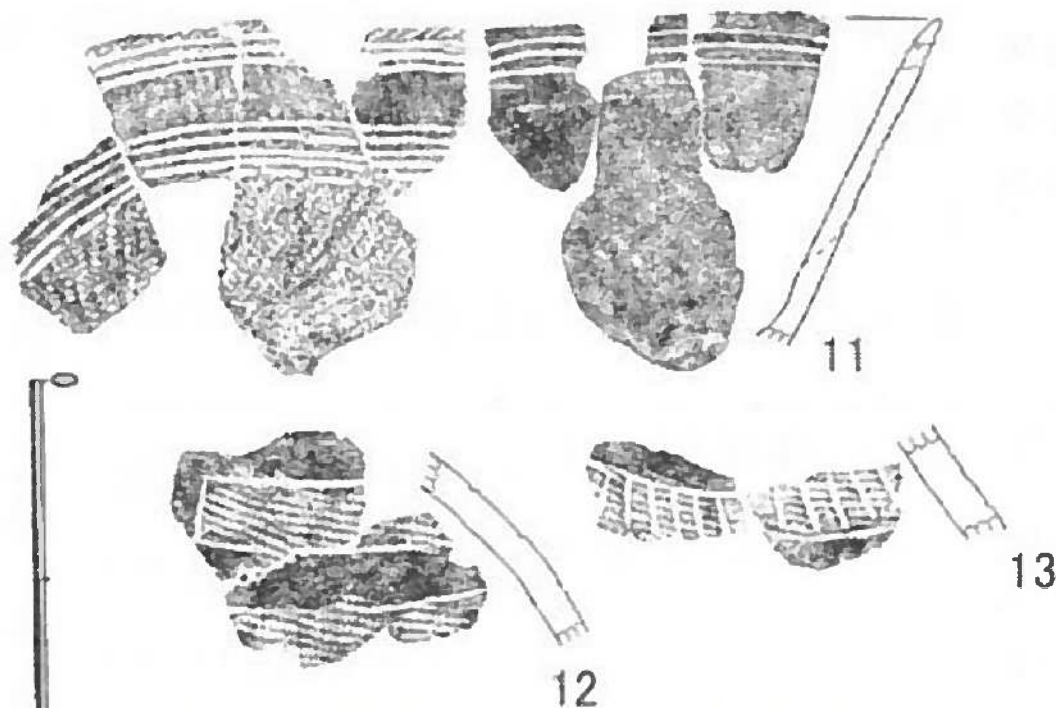


管玉とその製作資料



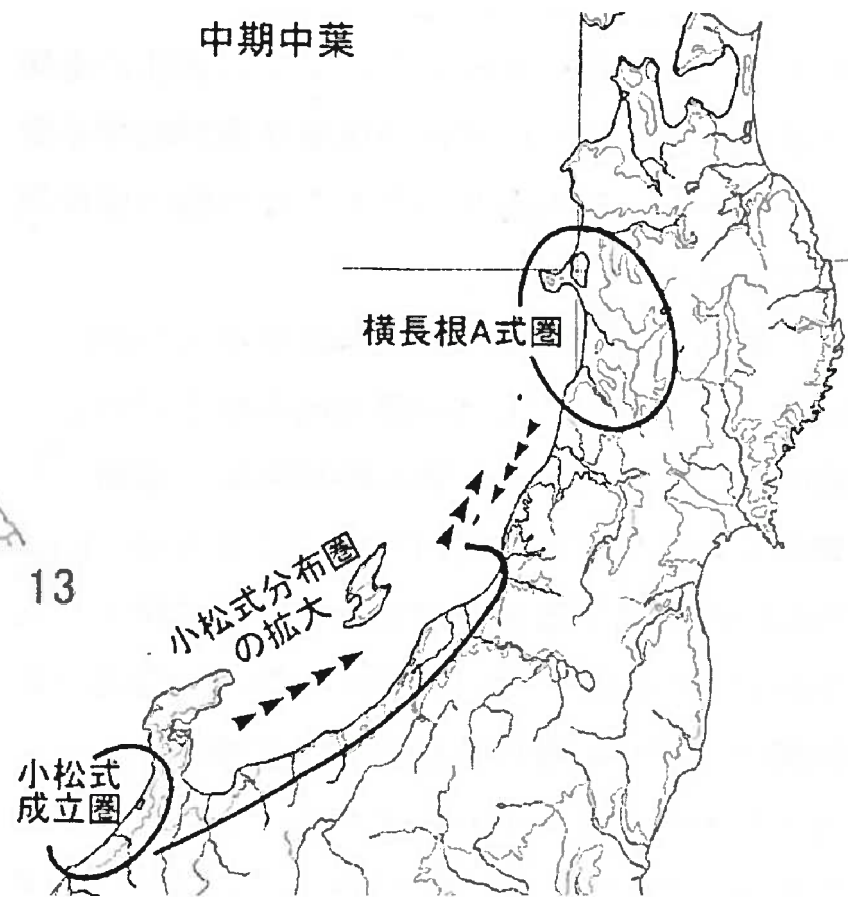
東日本各地との交流を示す弥生土器

男鹿地域： 中期前葉横長根A式におけるハケメ整形の採用 と南下動向

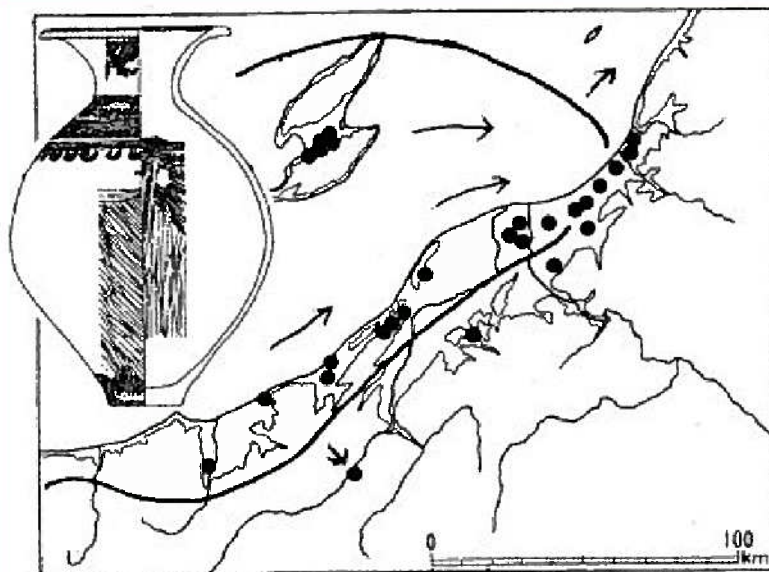


新潟市西郷遺跡の横長根 A 式

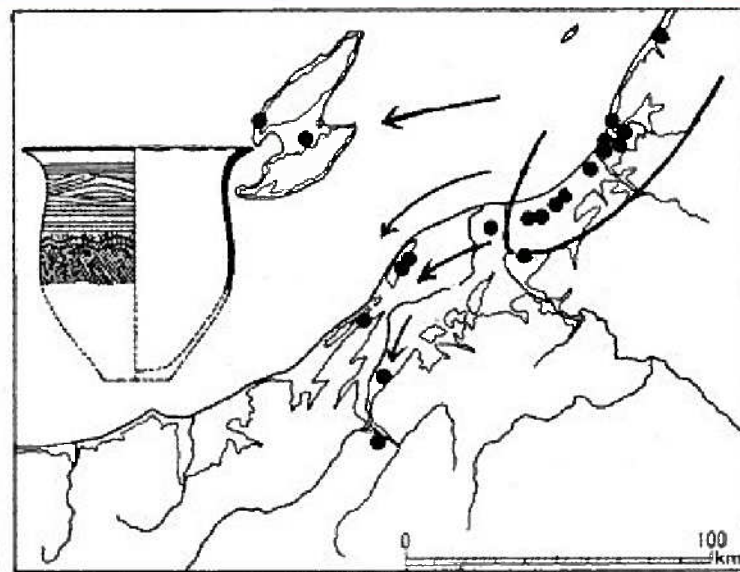
・川岸場式土器 (石川2012)



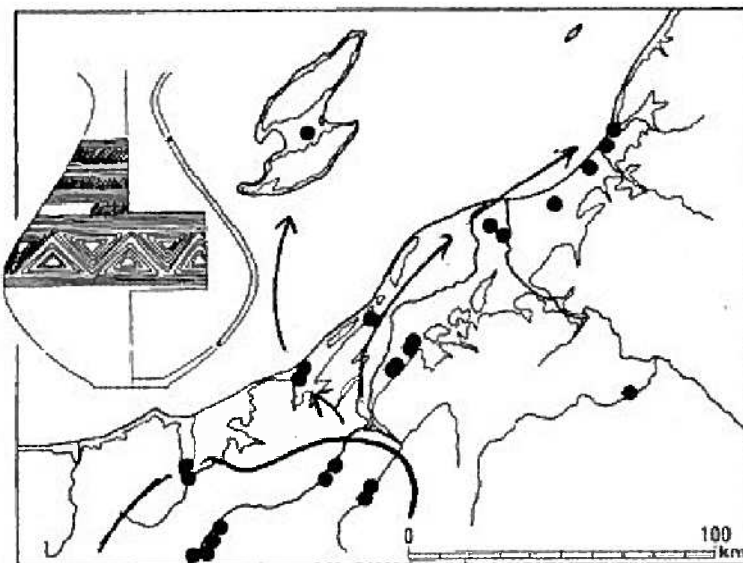
西郷遺跡ののち，中期中～後半(BC2-1世紀)の相互交流



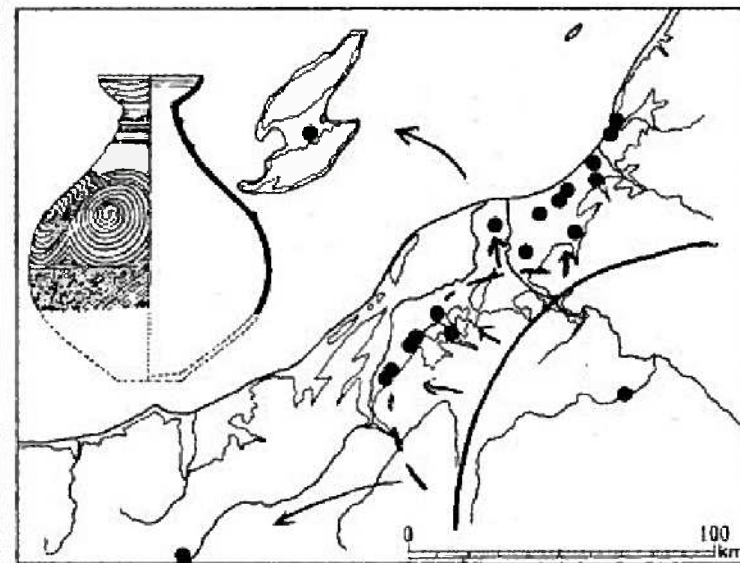
北陸系(小松式)



秋田方面系(宇津ノ台式系)

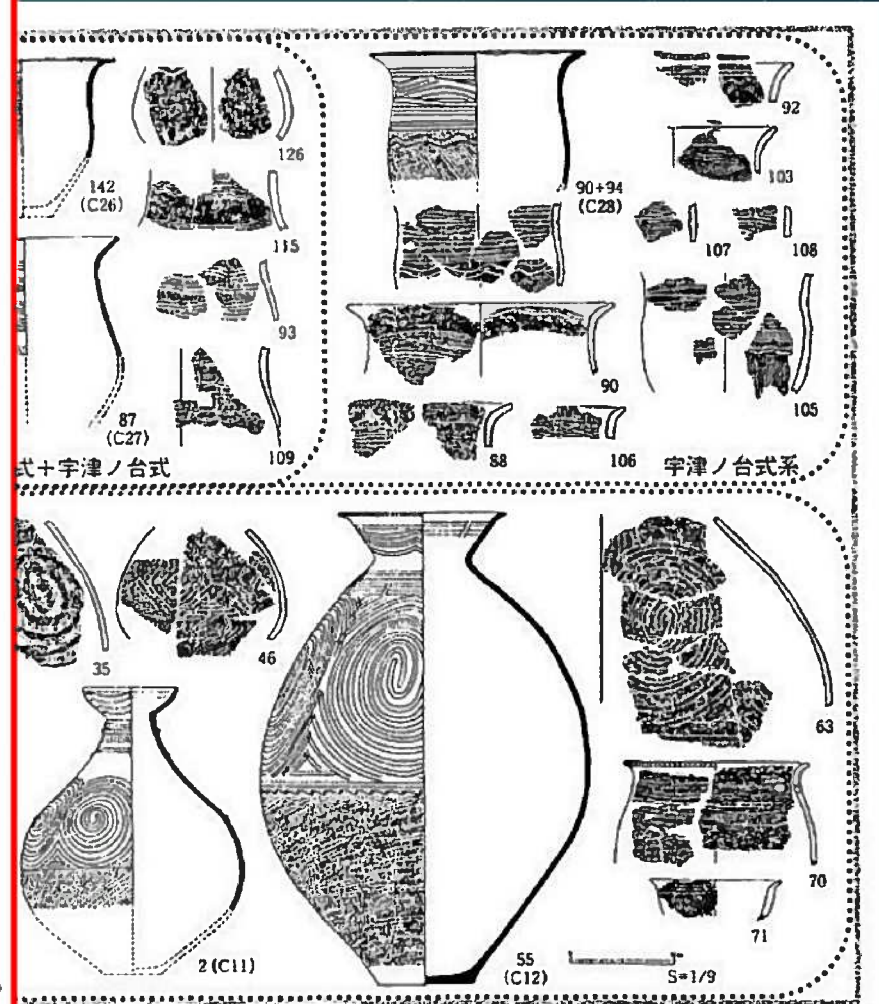


長野系(栗林式)



福島方面系(川原町口式)

中期後葉＝秋田方面の宇津ノ台式土器が下越まで南下し、 北陸系の小松式とハイブリッドを起こす ⇒ 次代へ

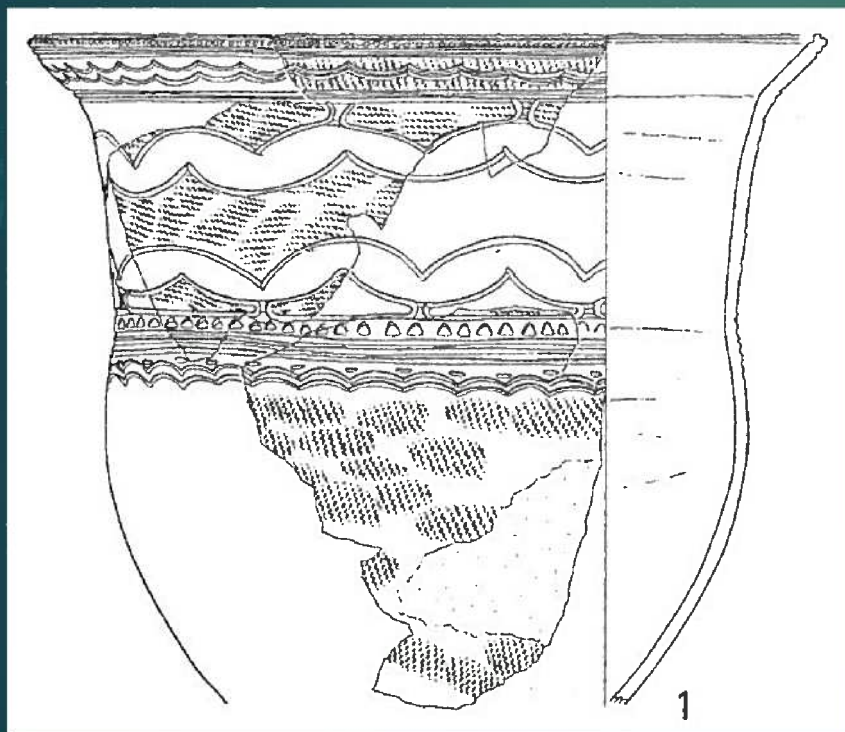


新潟県新発田市早何遺跡における中期後葉土器群の系統複合 (新発田市2018)

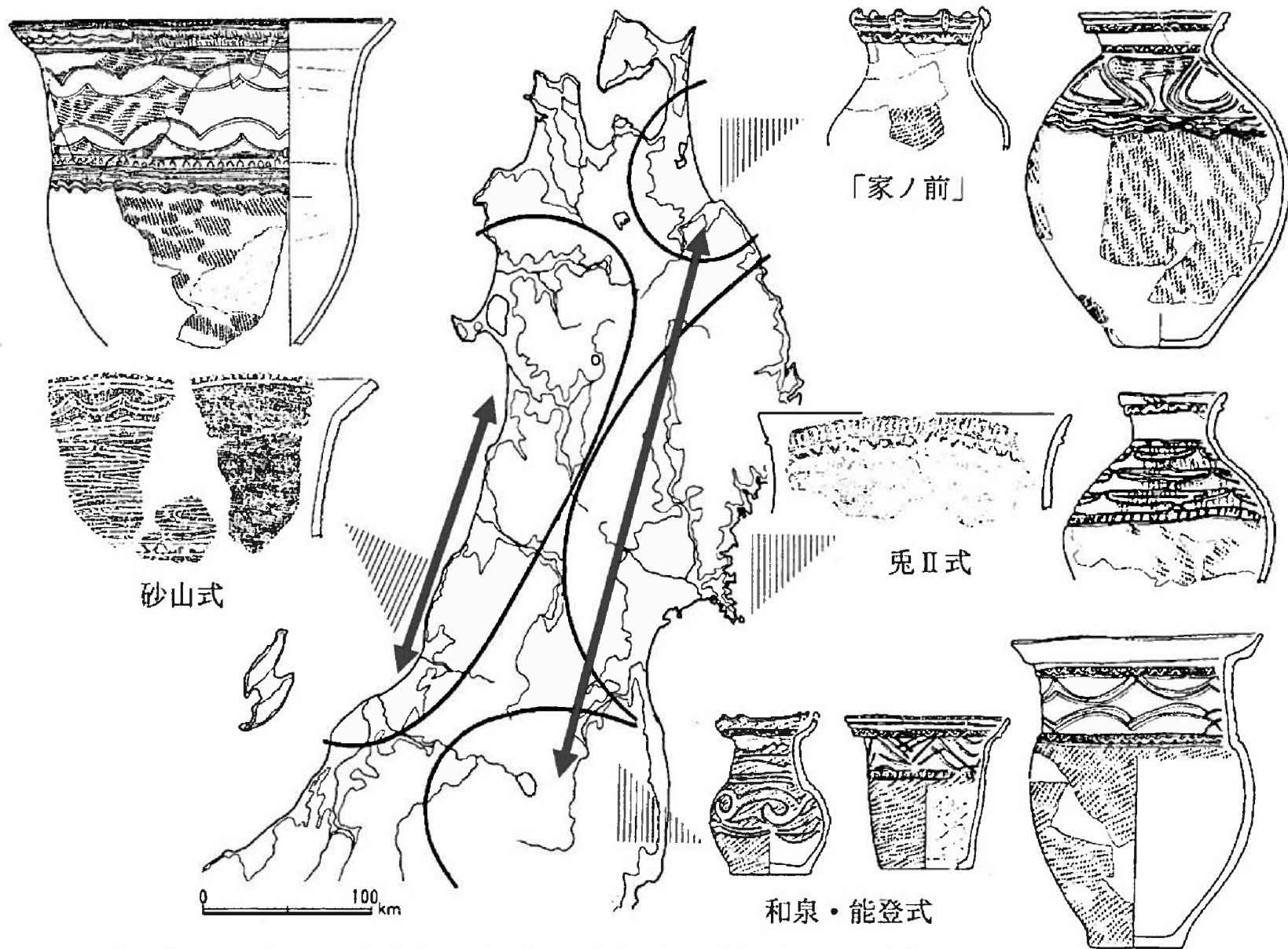
日本海沿岸の南北交流

3. 後期初頭(AD1世紀頃): 下越集団の活躍

中期後葉の宇津ノ台式の南下は下越地方まで顕著であったが
後期初頭になると、その後継土器型式である砂山式土器は
富山・石川両県域に多数の遺跡を形成する。
この動向の意味するところは何か？

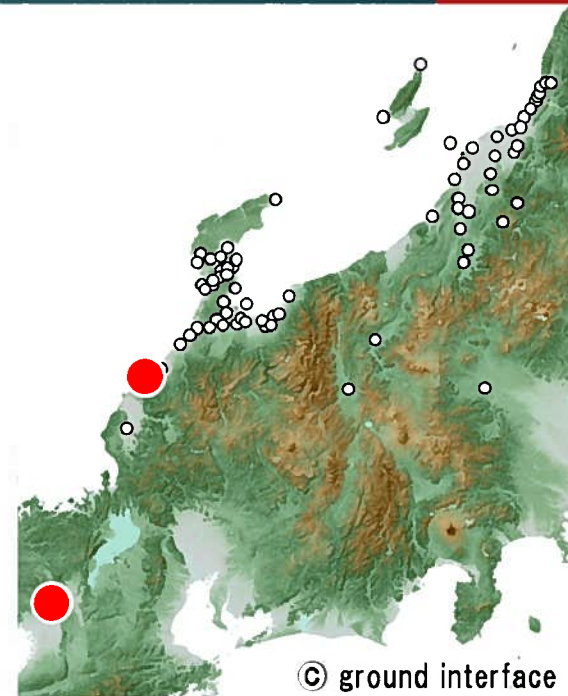
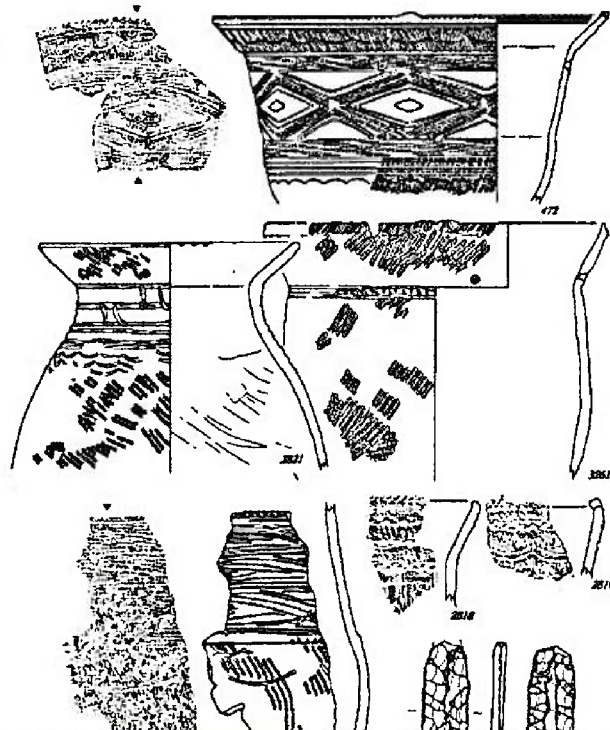
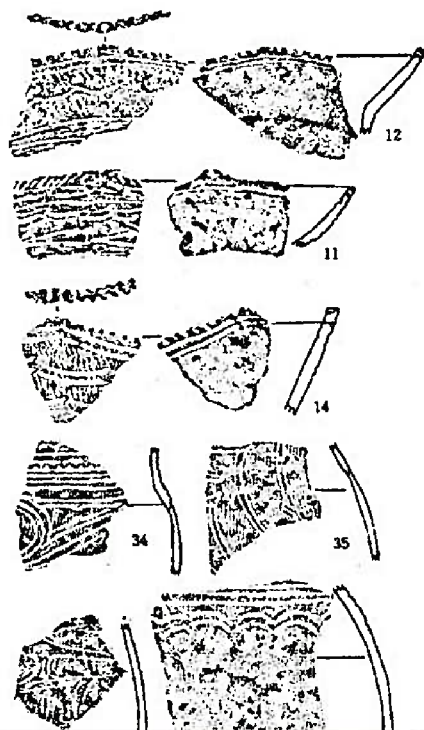


砂山式土器(プロト天王山式)



後期初頭（「プロト天王山式」）における東北地方の再編動向（石川2012に矢印加筆）

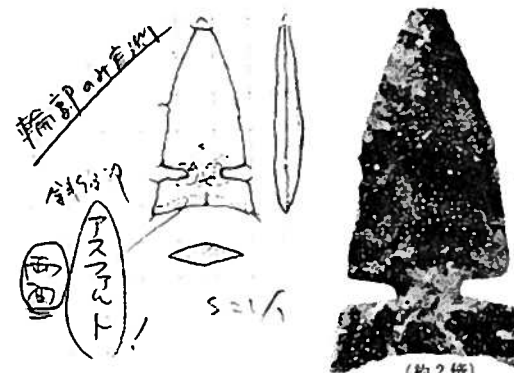
富山・石川両県域に多数の遺跡を形成



© ground interface



加賀市大野山遺跡の天王山式土器 (石川作図)



大阪府芝生遺跡 (石川メモ、右:『新版古代の日本』5) (約2倍)

北陸における砂山式 (プロト天王山式の新潟北部類型) の動向 (石川2021a)

... 日本海沿岸の南北交流は後期初頭にも継続する

誤記訂正願います: 3ページ下から2行目

そして興味深いのはこの砂山式土器とそっくりの土器群が富山・石川両県の多数の遺跡で発見されていることです。一つの遺跡で発見される土器片の数量は多くないものの、その遺跡の数は驚くほどです。上越ではこれまで一片も発見されていないので、下越から海路で富山湾や邑地潟地溝帯むらちがたこうたい一带に渡ってしばらく滞在して、その地の人びとと盛んに交易をおこなったのであろうと私はみています。現在までのところ、その出土例の最西端は、石川県最南端にほど近い加賀市橋立町大野山遺跡おかののやまですが、下越の関川村で産出する石材を使ったアメリカ式石鏃という形態の石鏃が大阪府高槻市芝生遺跡なかつきで見つかったので、将来的には福井県遺跡でも見つかる可能性があります。

では、こうして下越から北陸に出かけた人々は何が目的だったのでしょうか。土器が発見されるだけな

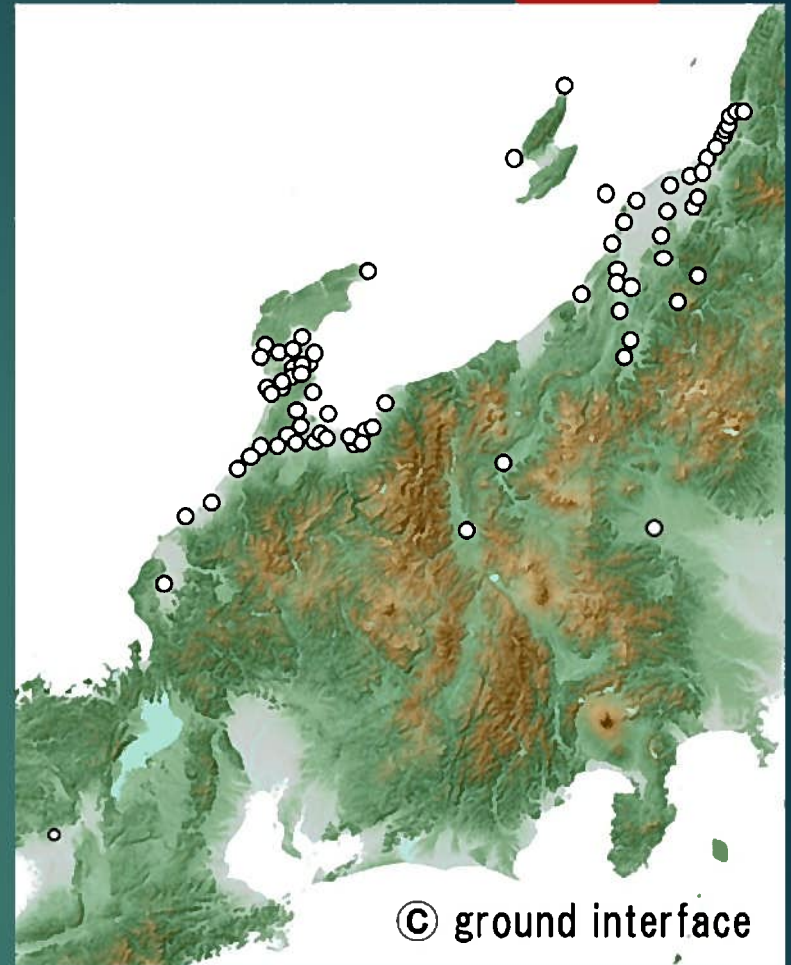
には福井県遺跡でも見つかる可能性があります。

↓
以西

下越から北陸に出かけたのはなぜ？

この時期＝ 鉄器や鉄素材が日本列島に急速に普及して、利器(刃物や武器)の素材が石から鉄に全面的に交替

朝鮮半島から入手された鉄器や鉄素材が日本海沿岸伝いに広く流通するなかで、それ入手するために下越から夏場に丸木舟で北陸まで往来したのだと考える



そして入手した鉄器を東北地方や北海道方面に搬出したのだと。東北地方では、弥生時代後期には打製石鏃など消耗率の高い石製利器は存続しますが、磨製石斧はほとんど見かけなくなります。これは鉄斧が普及したからに違いありません。

古津八幡山遺跡は、この頃に始まり、弥生末まで**継続**



東側上空から

©新潟市教育委員会

新潟市秋葉区：西～北に新潟平野を一望できる丘陵上に立地



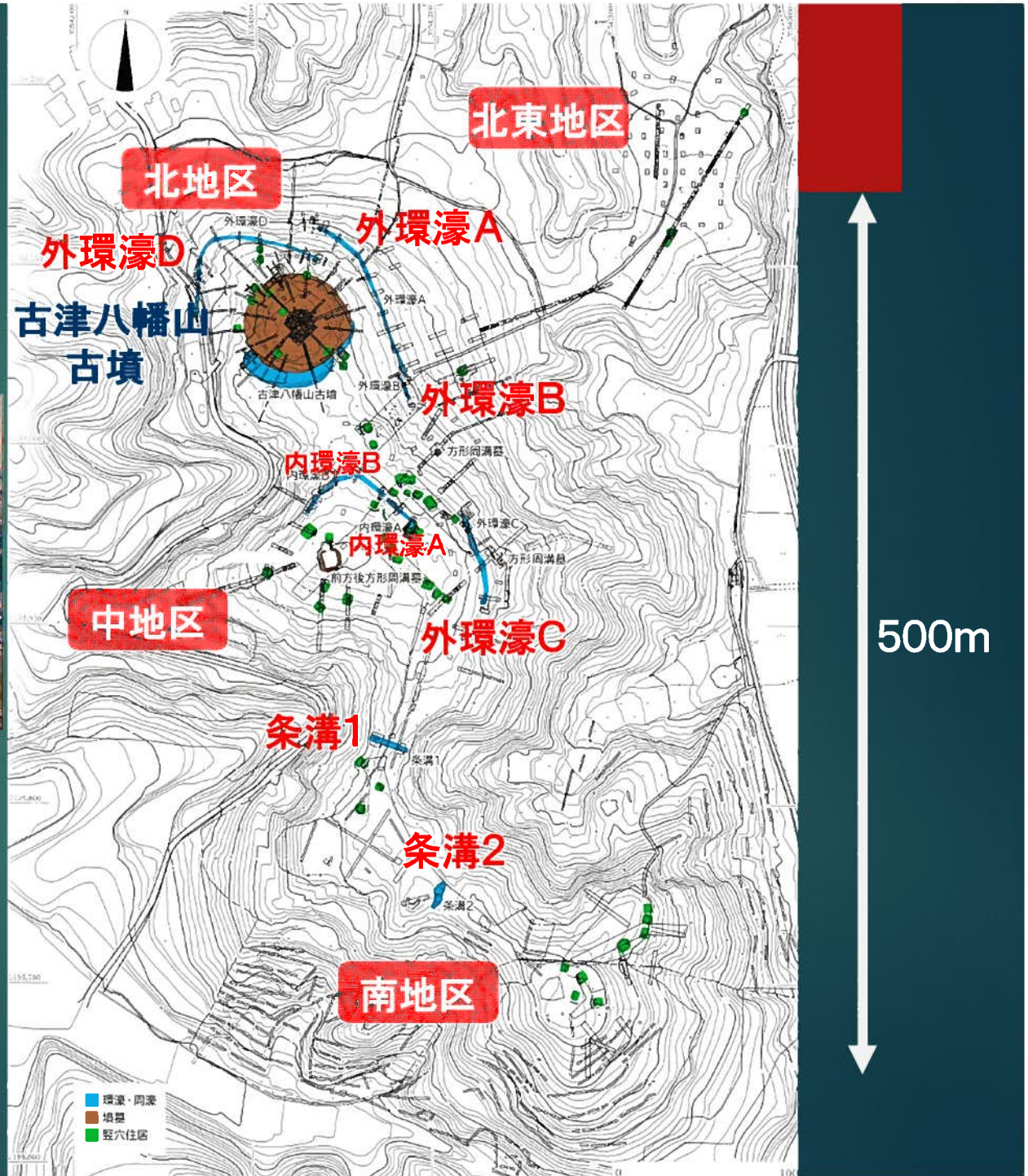
古津八幡山 遺跡の全体図



©新潟市教育委員会

新潟平野
= 標高約5m以下

古津八幡山遺跡
= 標高40~45mの丘陵上





古津八幡山遺跡 第3次調査 北地区 環濠



2.1×1.1m

第10次調査 S X 1005



第10次調査 S X 1005



第10次調査 S X 1005

第10次調査 北地区 方形周溝墓

国史跡指定・整備・・・整備活用のモデルケース



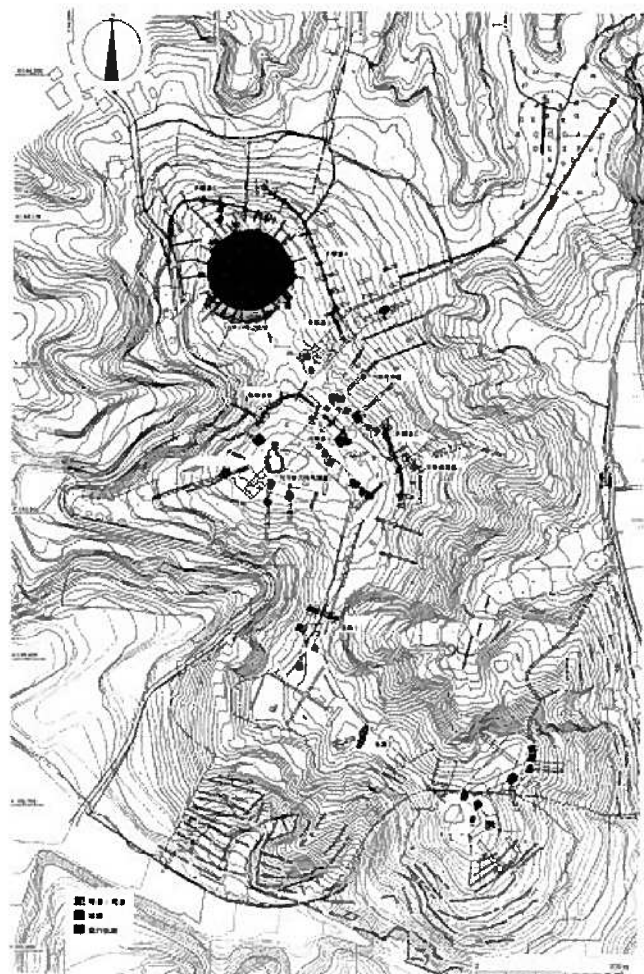
(撮影:石川)

私はこの写真をZoomの背景に使っています ♪

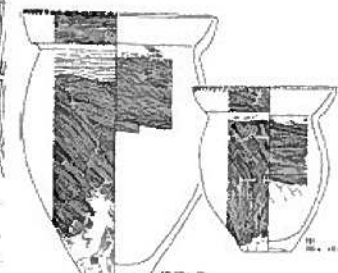
4. 後期中葉～後葉(AD2世紀～3世紀): 新たな時代への動き

ところが後期後半(V期後半)になると、天王山式系統の土器は新潟県域西半以西では全く見られなくなる。

それどころか、北陸の土器・住居・墓制などの諸文化属性が阿賀野川下流域のみならず、会津盆地にまで明瞭となる。



東北系 (天王山式) 土器



折衷 (古津八幡山式) 土器



北陸系 (猫橋式) 土器

東北系



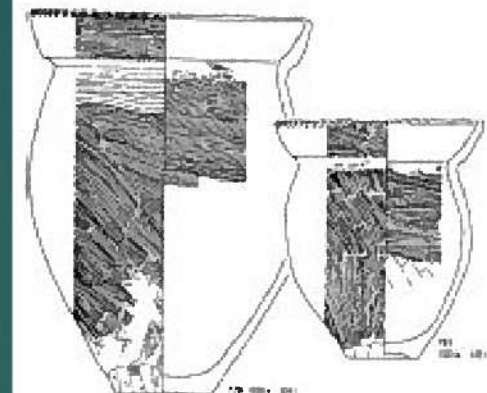
折衷系



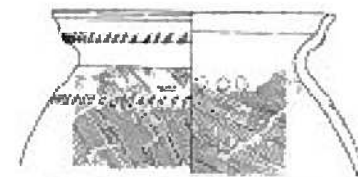
北陸系



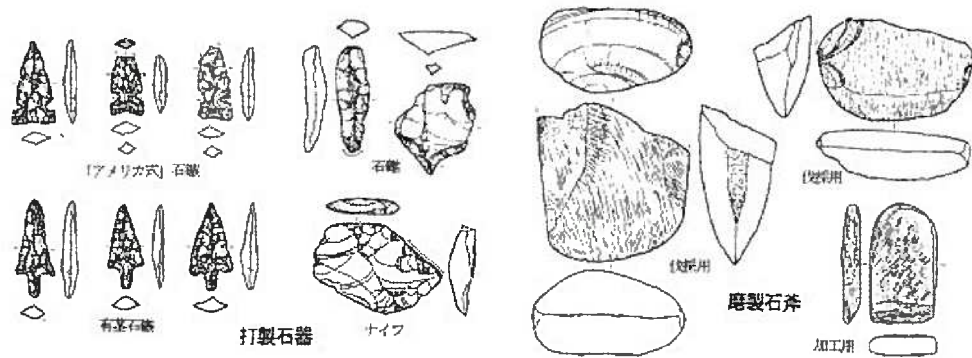
東北系 (天王山式) 土器



折衷 (古津八幡山式) 土器



北陸系 (法仏式) 土器



〔アメリカ式〕石鏃

石鏃

有茎石鏃

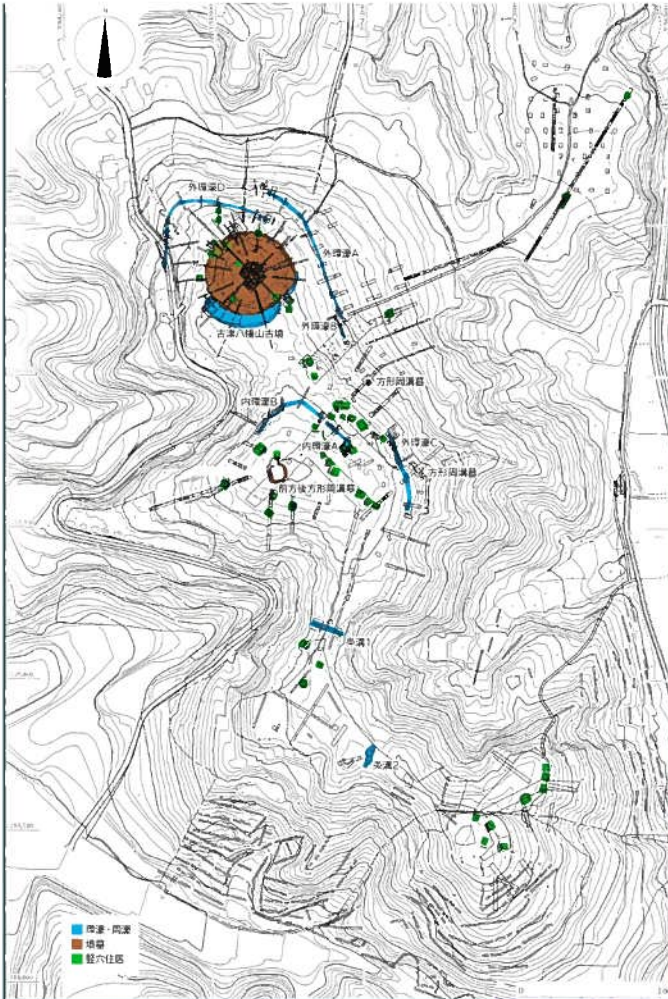
打製石器

ナイフ

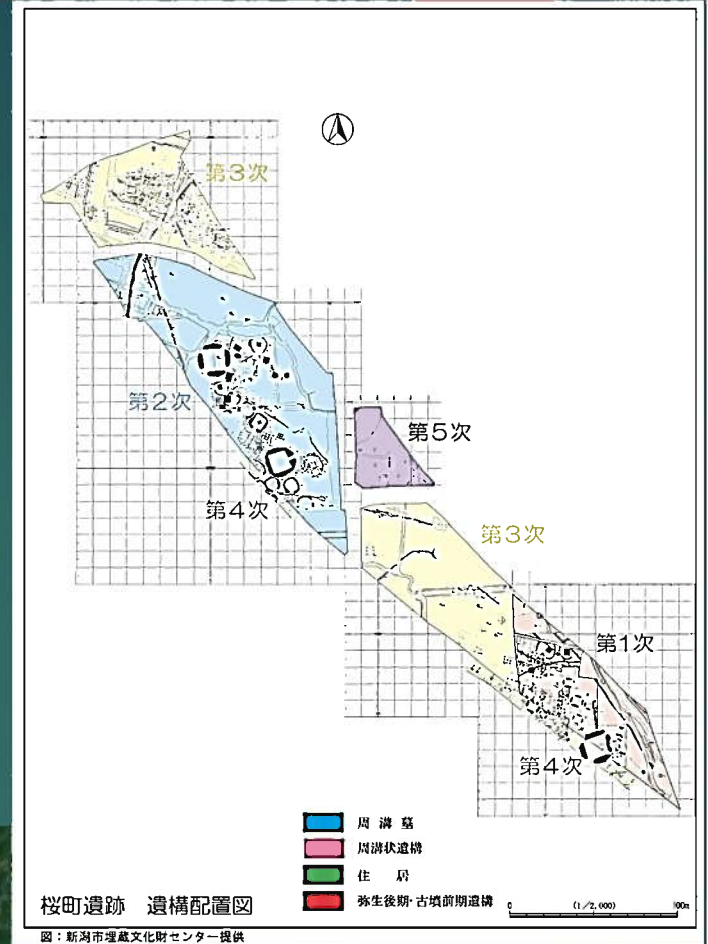
〔法仏用〕

磨製石斧

加工用



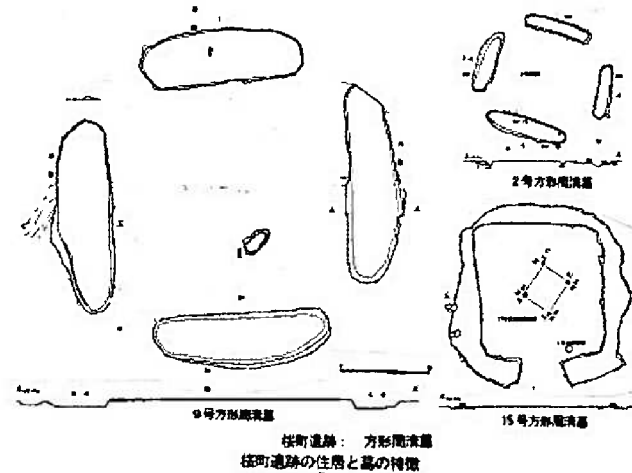
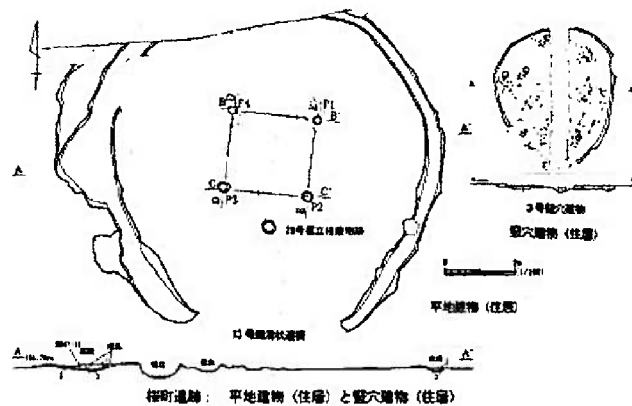
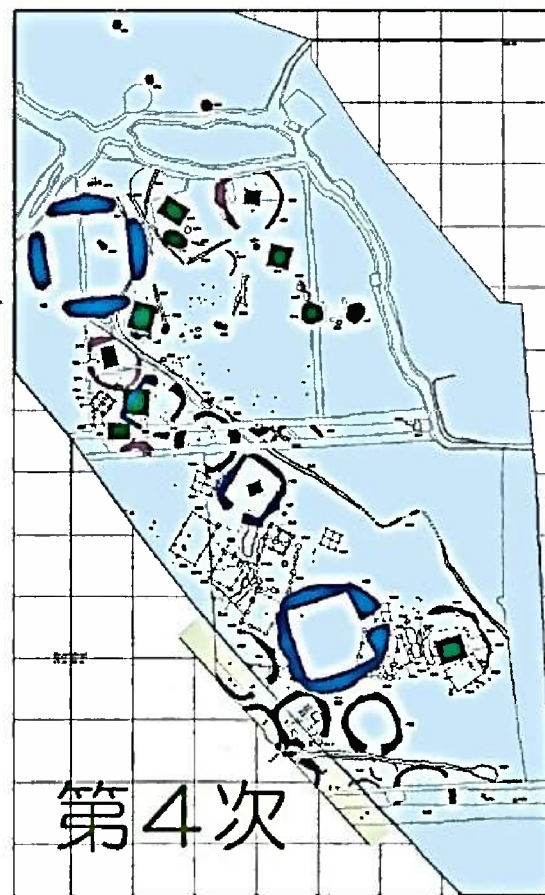
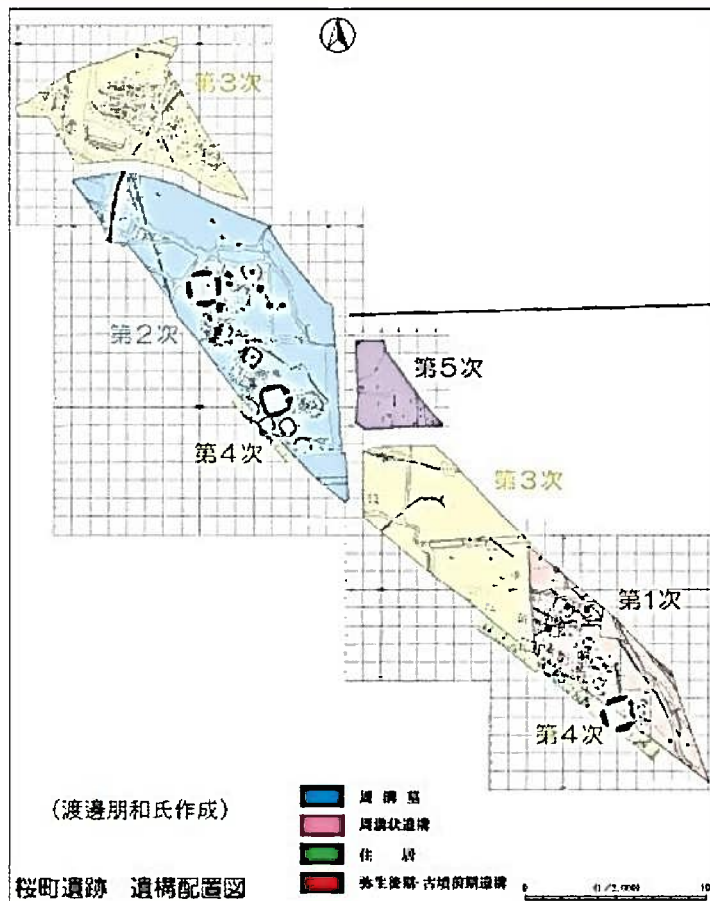
会津盆地にも
激動が！

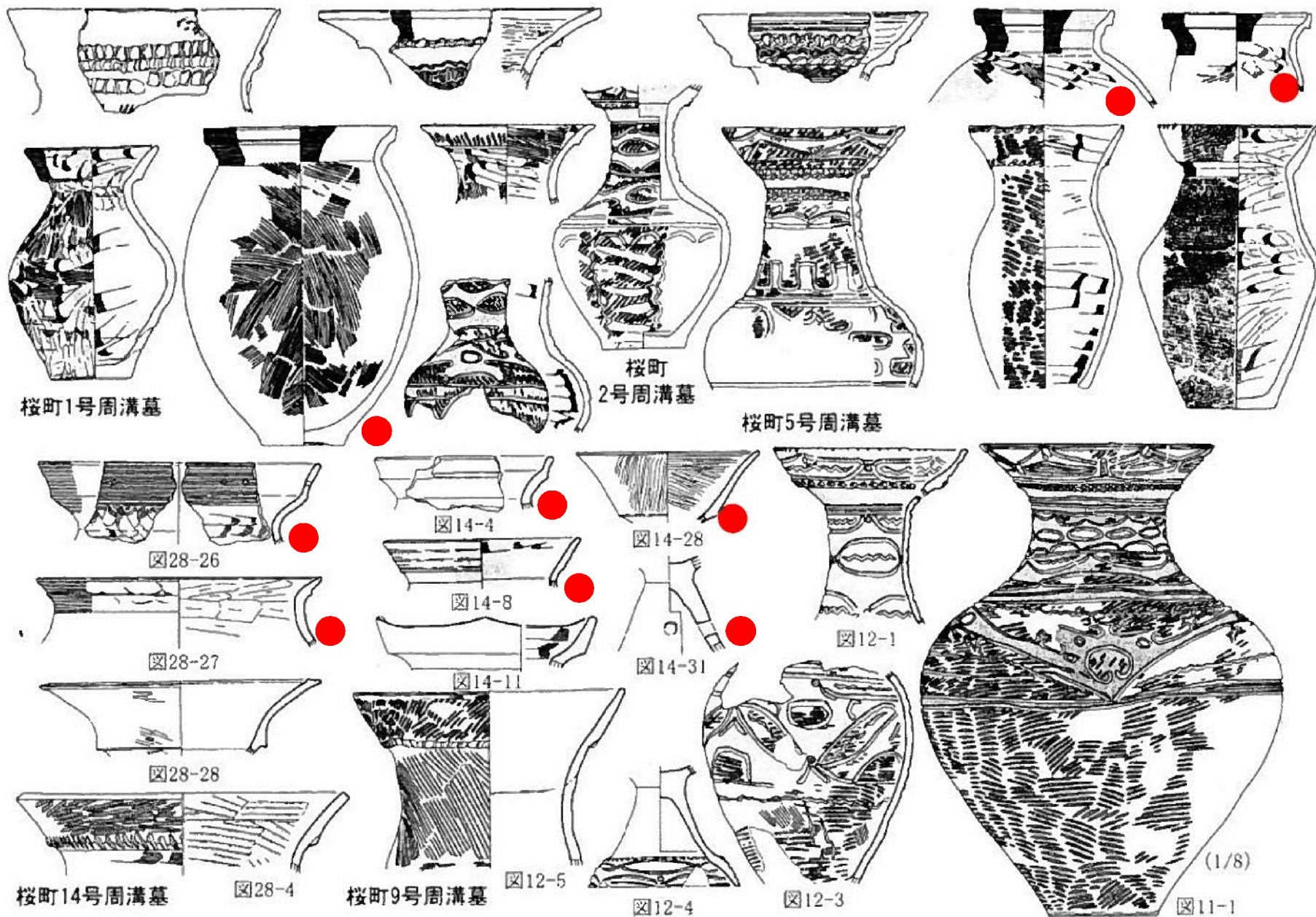


会津盆地 の激動

湯川村 桜町遺跡

北陸由来の
平地住居・
四隅土橋形方
形周溝墓
など





桜町1号周溝墓

桜町2号周溝墓

桜町5号周溝墓

図28-26

図14-4

図14-28

図12-1

図28-27

図14-8

図14-31

図28-28

図14-11

図12-5

図12-4

図12-3

桜町14号周溝墓

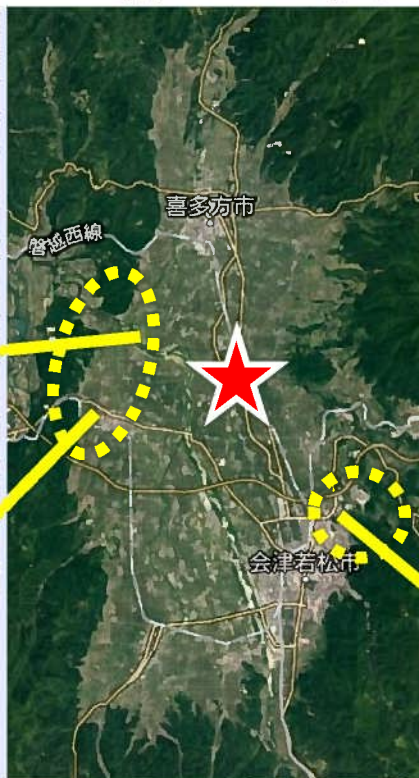
図28-4

桜町9号周溝墓

(1/8)

図11-1

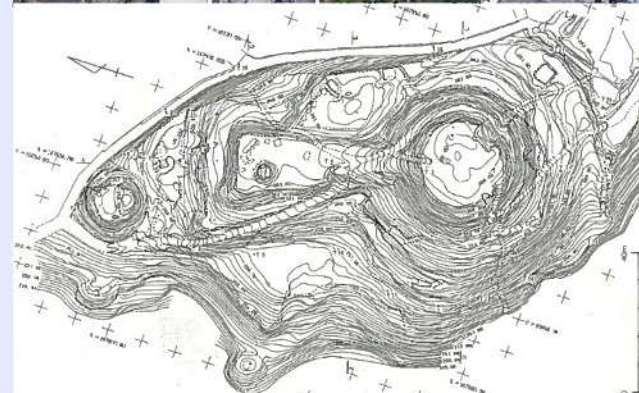
会津盆地： 桜町遺跡から 古墳時代へ

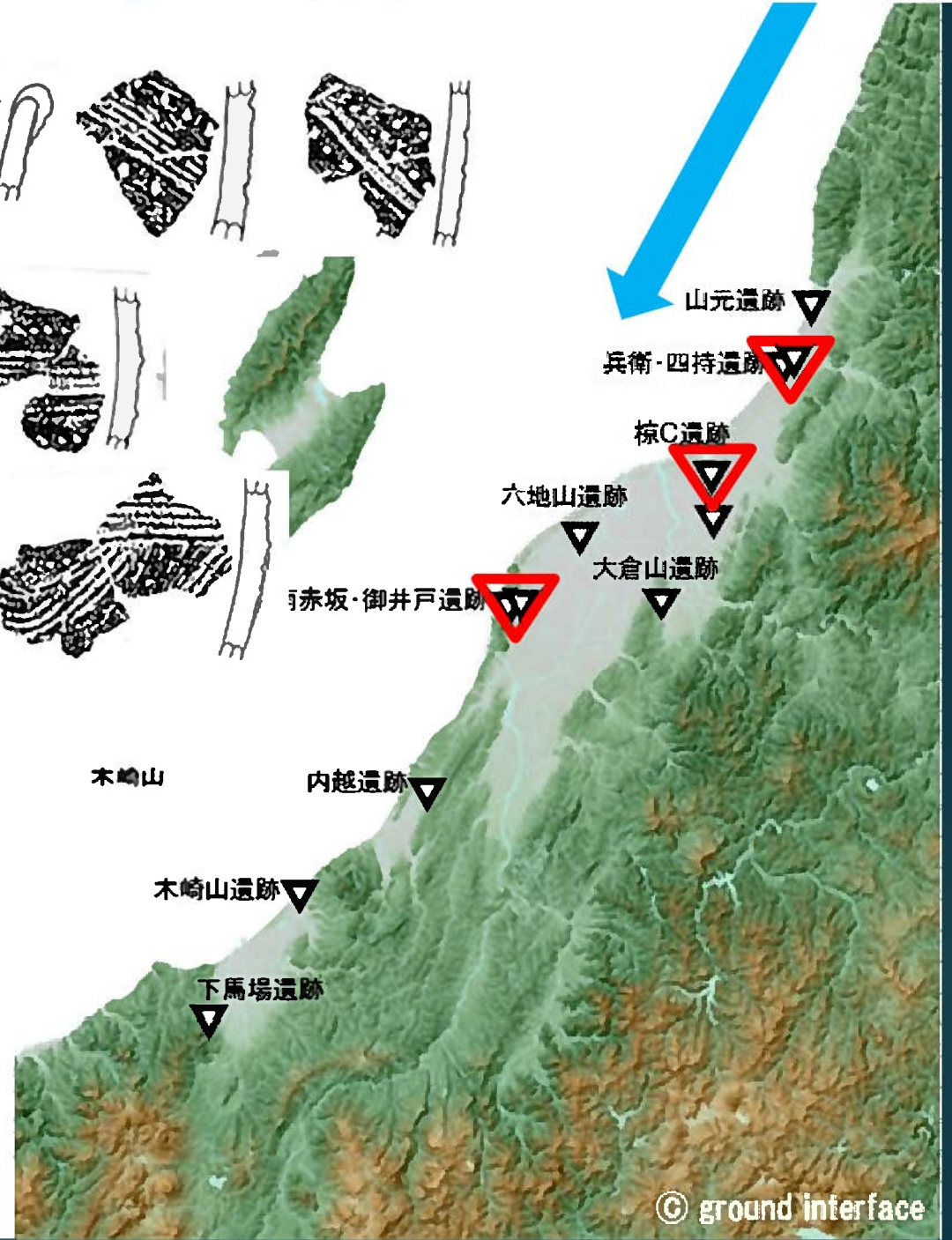
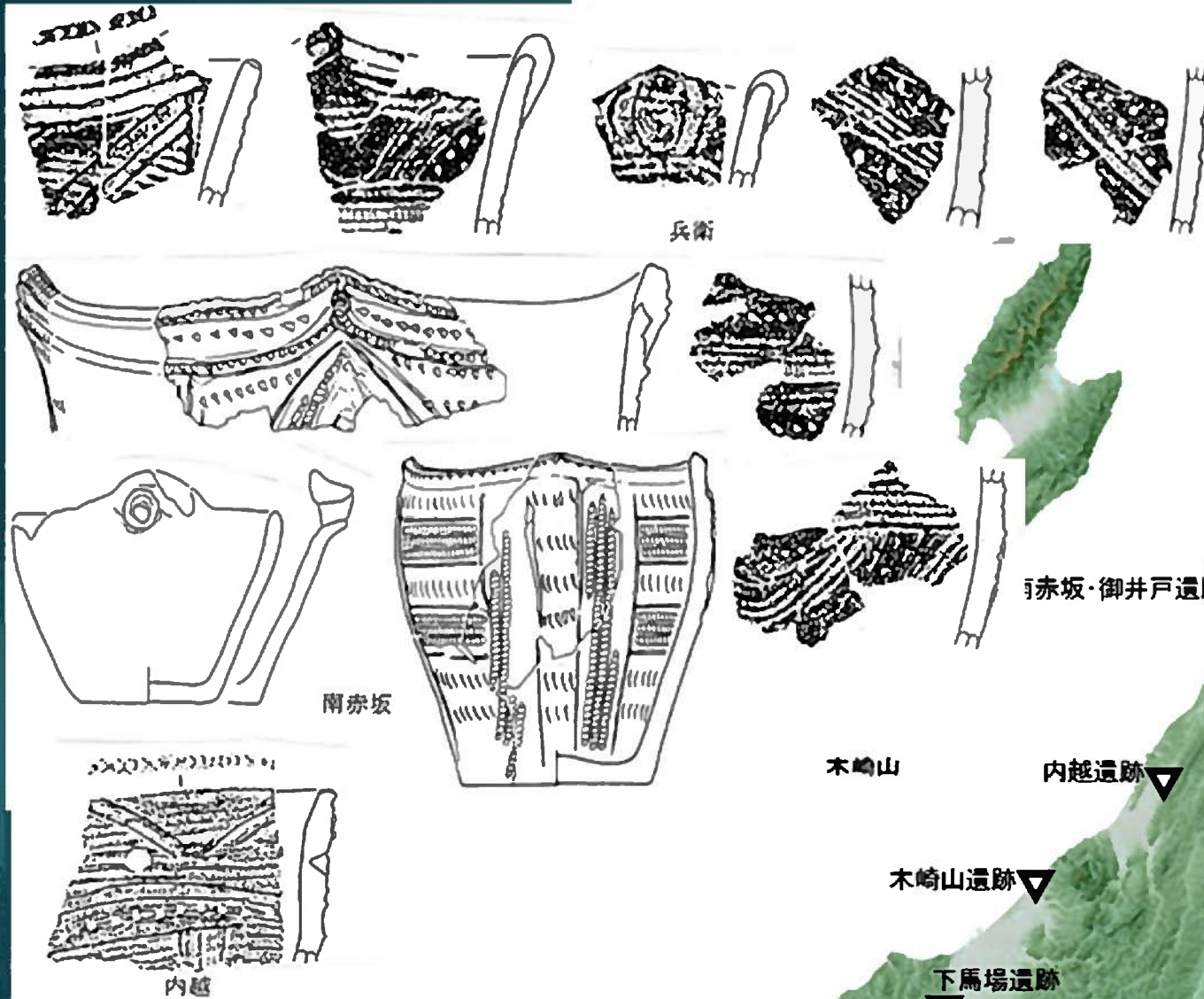


© Google Earth



会津大塚山古墳



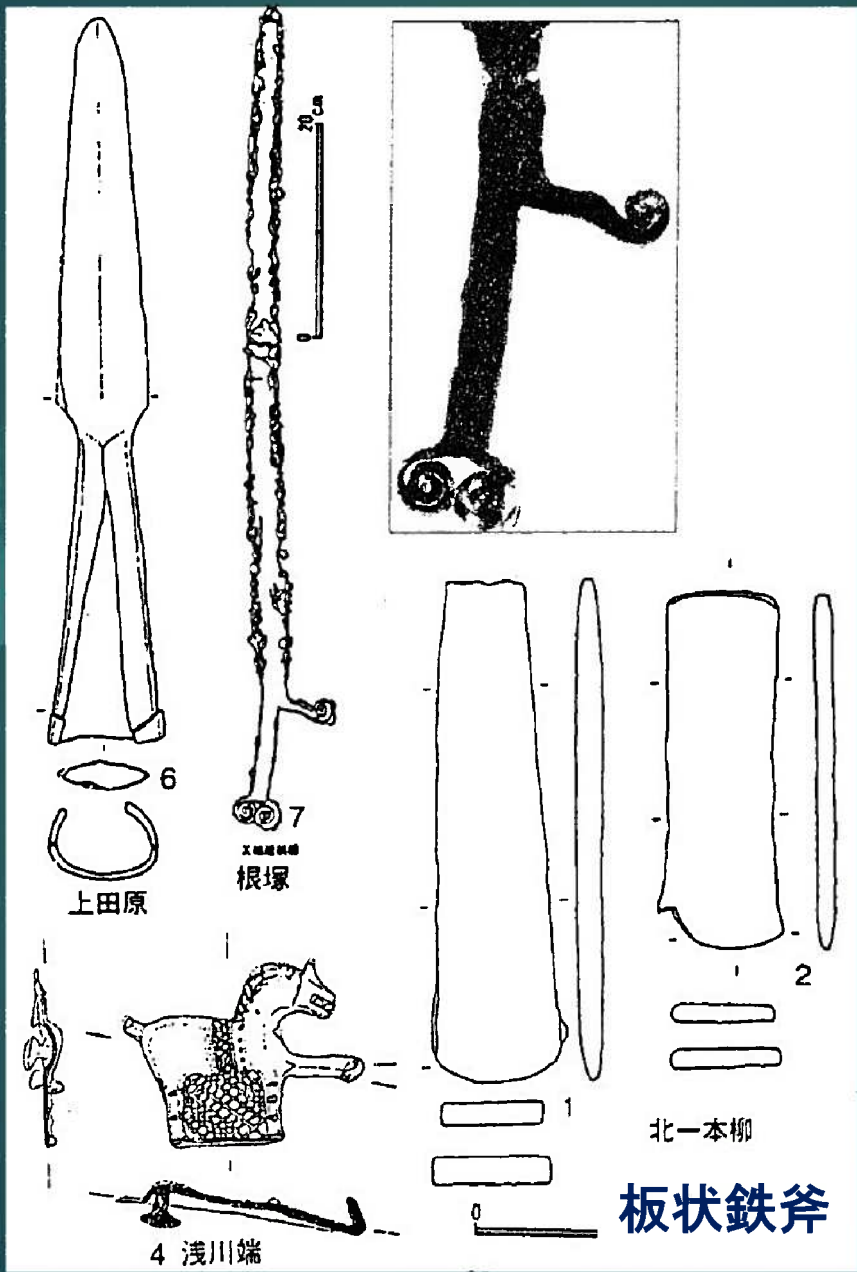


新潟県域沿岸部の続縄文土器
(後北C1式) :
多数派となる遺跡と少数派遺跡

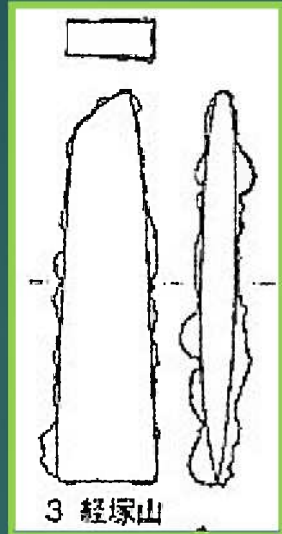
長野県北部や新潟で発見された朝鮮半島製の鉄器と青銅器



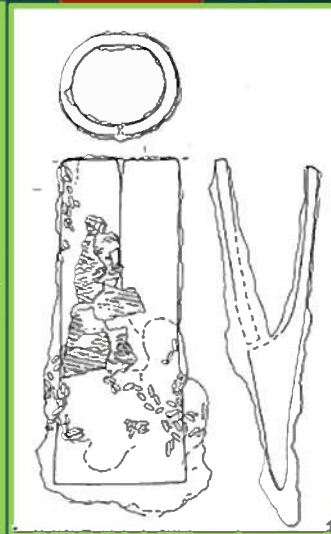
鉄矛



板状鉄斧



3 経塚山

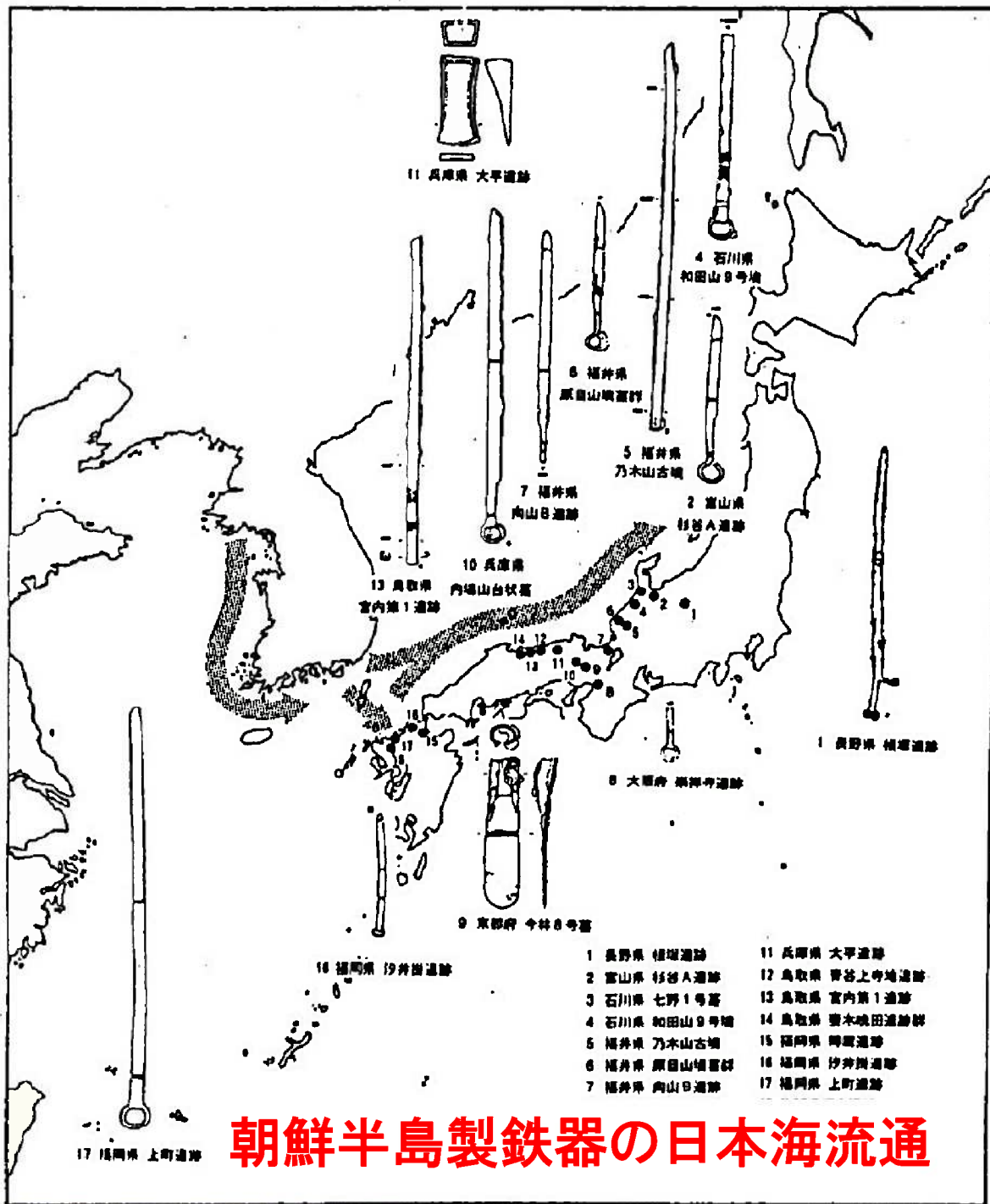


三条市経塚山・長岡市姥ヶ入南



韓国出土例

長野県北部の
朝鮮半島製品は
上越～北陸経由で
もたらされたもの



朝鮮半島製鉄器の日本海流通

おわりに

弥生時代と言っても新潟県域ですとBC4世紀前後からAD3世紀までと長期にわたる。

その間、新潟県域はつねに東・西・南・北の隣接地域と盛んに交流を重ねる。はじめは土器のデザインなどの面に留まったが、やがて稲作や装身具・集落形態など、さらには鉄器や青銅器などの当時最先端の技術や器物の授受にまで進みます。

そうした地域間交流はリレー式で日本列島を覆うほどの規模になり、朝鮮半島など大陸世界もリンクする。

ちょうどその頃、西日本の最有力者たちは大陸の政治的世界・王権・王朝とも交渉を重ねるようになる。そうした日本列島内、さらには東アジアを巻き込む交流が日本列島社会を政治的世界へと変貌させる。それが古墳時代社会の形成につながる。

こうした日本列島を舞台とする歴史の変遷過程が、新潟県域を探るだけでも見えてきます。新潟県域の弥生時代・文化の魅力はそこにあると考えます。

ご清聴ありがとうございました。



写真：国史跡・新潟市古津八幡山遺跡

めいじろう
(明治大学のイメージキャラクター)